

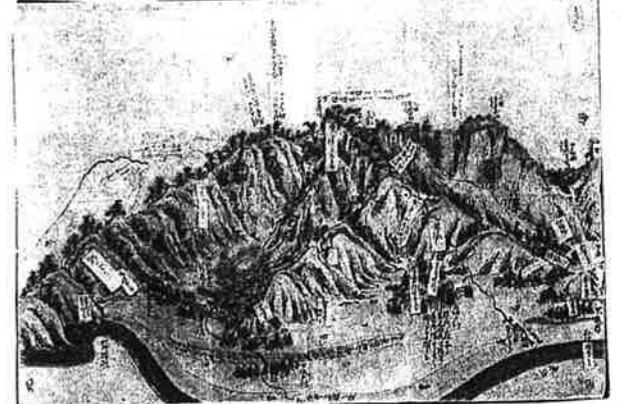
村松藩祖堀直奇公一代記 正小島

澤庵禪師との交流！



優遊自立堂生涯
 月下伴て花底咲
 熟業未だ三人別
 滿腹走色白行旅
 古休
 元是胡才教工曲
 有唐之後此老類
 四頭彈起古今去
 并二善才為一人
 但作法華

▲堀直奇公が寛永十三年六十歳のとき、特野探幽に描かせた「御奔影」替賀の京都大徳寺の玉室沢庵、江月和尚と直奇の武勇と功績を賛えてゐる。直奇は新潟湊の基礎を作った。



▲堀直奇の居城 坂戸城(六町)①

徳川家康書状
 後長五年(一六〇〇) 関ヶ原の戦い
 徳川家康書状 堀直奇宛 一通
 桃山時代 慶長五年(一六〇〇)

▲徳川家康書状 堀直奇宛 一通

徳川家康の上杉征伐のため、東軍は山に集結して来た。その時石田三成を中心とした西軍が決起し、大垣城を占拠した。この報が届く。堀直奇は越後での一揆を圧倒し家康から感状をもら

徳川家康書状 堀直奇宛 一通
 桃山時代 慶長五年(一六〇〇)
 「包紙」堀丹後守殿
 従會津上田庄へ
 手出候處即被達
 合戦敵五百餘人
 被討捕之由手柄之
 儀共誠無申計候
 此上無越度様之
 手置尤候猶西尾
 隱岐守可申候恐々謹言
 八月七日 家康 (花押)
 堀丹後守殿

徳川家康書状 堀直奇宛 一通
 桃山時代 慶長五年(一六〇〇)
 急度申候仍大柿二
 治部少輔・嶋津・備前
 中納言・小西攝津守
 籠居候即取巻可
 成水責として早速
 令出馬候自然景勝
 其口於相動者眞田
 伊豆守・本多豊後守
 平石主計頭・牧野右馬允
 申付候條有談合其
 元城堅固可被相抱儀
 肝要候為其以飛脚
 申候恐々謹言
 九月朔日 家康 (花押)
 堀丹後守殿



▲徳川家康

▲慶長二十年五月、大坂夏の陣が始まる。



▲慶長期の大阪城中樞(復元模型)

大坂城、冬の陣では大砲を打ち、五月六日の道明寺の戦いで堀直奇隊は戦死した。真田幸村は霧のためこの戦いに参加できなかった。

徳川家康書状
 堀直奇宛
 慶長二十年(一六四五)二月一日
 堀直奇が近江国日野の所田左吉に鉄炮三百挺を注文した古文書

▲鉄炮注文書
 慶長二十年(一六四五)二月一日
 堀直奇が近江国日野の所田左吉に鉄炮三百挺を注文した古文書



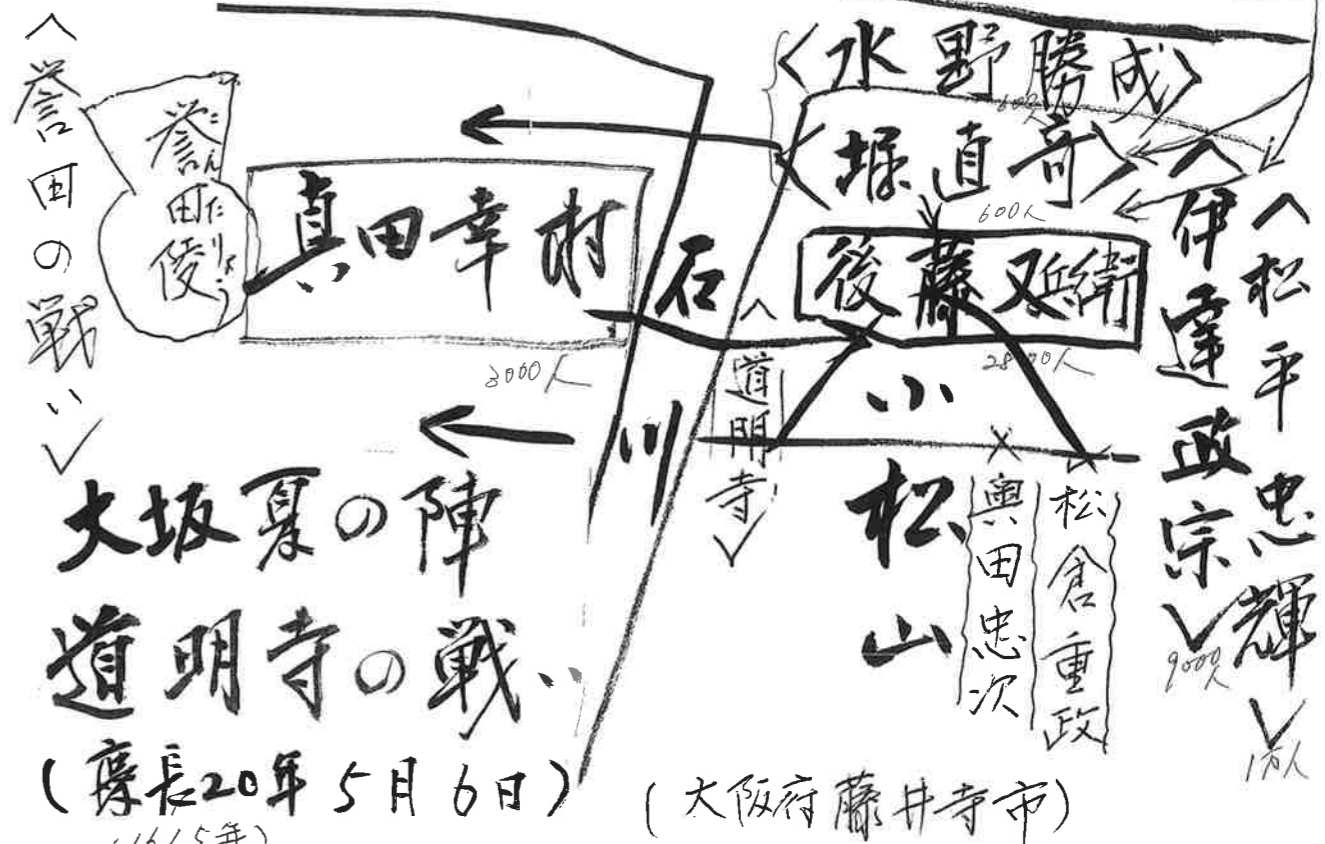
▲後藤又兵衛の奮闘

後藤又兵衛は五月六日の道明寺の戦いで、堀直奇隊と戦ったが、奪取できなかった。

大和口

大和川

大坂



大坂夏の陣 道明寺の戦い

(慶長20年5月6日)
(1615年)

(大阪府藤井寺市)

松平隆昌も三人の瓦とるを名(二)と化して此陣に
 戦う一役は下(三)と化して此陣に
 有るも肥前も(四)と化して此陣に
 前に表裏(五)の陸奥(六)と化して此陣に
 徳川家康(七)と化して此陣に
 金量(八)と化して此陣に
 市(九)と化して此陣に
 将軍(十)と化して此陣に

徳川家康は、七くなる直前堀直寄等
 も駿河(呼んで)礼を述べている。
 (「駿河土産」より) 元和2年
 4月17日死去

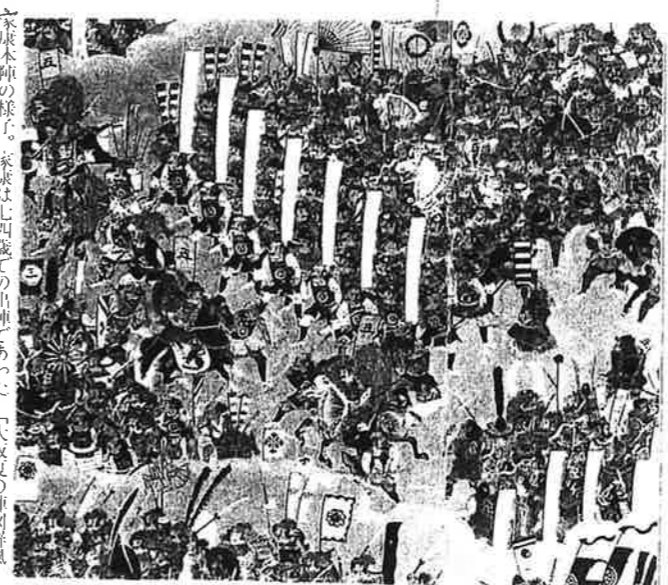
元和二年
 長岡城主堀直寄
 は、長岡城内を
 整備すること
 に、新潟湊整備
 に着手した。

元和三年
 長岡藩主堀直寄の「新潟新町村木町等町
 建達書」

元和3年7月長岡藩主堀直寄の「新潟新町村木町等町
 建達書」

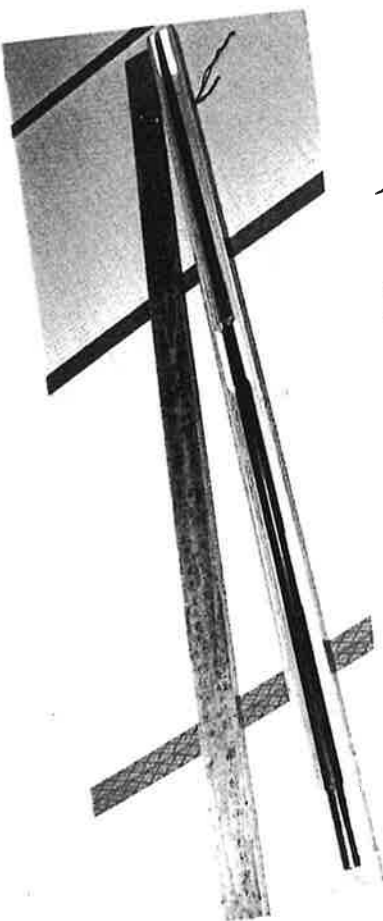


村上城趾
 元和四年
 (一六二八)
 村上藩主
 村上忠勝
 が改易と
 なり、堀
 直寄を
 村上十方
 石に移す。
 寛永十六年
 (一六三九)直寄
 死去。



大坂夏の陣の様。家康は七四歳での出陣であった。「大坂夏の陣図解」

慶長二十年(一六四三)堀直寄は大坂夏の陣で六百騎を従えて戦い、軍功をあげた。翌元和二年(一六二二)徳川家康は、堀直寄を長岡藩主八万石入封した。



道明寺の戦いの戦利品の槍(日枝神社) ②

堀直奇と澤庵禪師



沢庵宗彭頂相 自贊 重要文化財 堺・祥雲寺藏

◎大徳寺百五十一世 新発見資料

澤庵和尚書簡 寛永六年

(出石藩主 小出大和守吉英宛)

尚て昨日は御残存候
薬酒の百文也

昨日は被成御立寄

候之処 堀丹州

同心にて南光僧上へ

参候 晩迄参候

所望被成候御六ヶ敷共

振舞にて罷帰候

故不懸御目御残

可為過分候 我等へ

多存候 (中略)

とかく永く処御座候

方人々江仕候へとも

急々に事すお

前の様、句分味無之候旨

如かく皆々被申候(中略)

如何可有御座也

其段不存事

天理自然と存候

恐々謹言

六月廿日 宗彭

小出大和守殿

人々御中

澤庵禪師書簡

寛永七年正月廿五日

小出吉英宛書簡

堀丹後守宛の

心付なと申事は

おやの子をおもひ様

に候。...

寛永九年七月廿日

小出吉英宛書簡

大僧正、柳但馬、

堀丹州三所飛脚参候

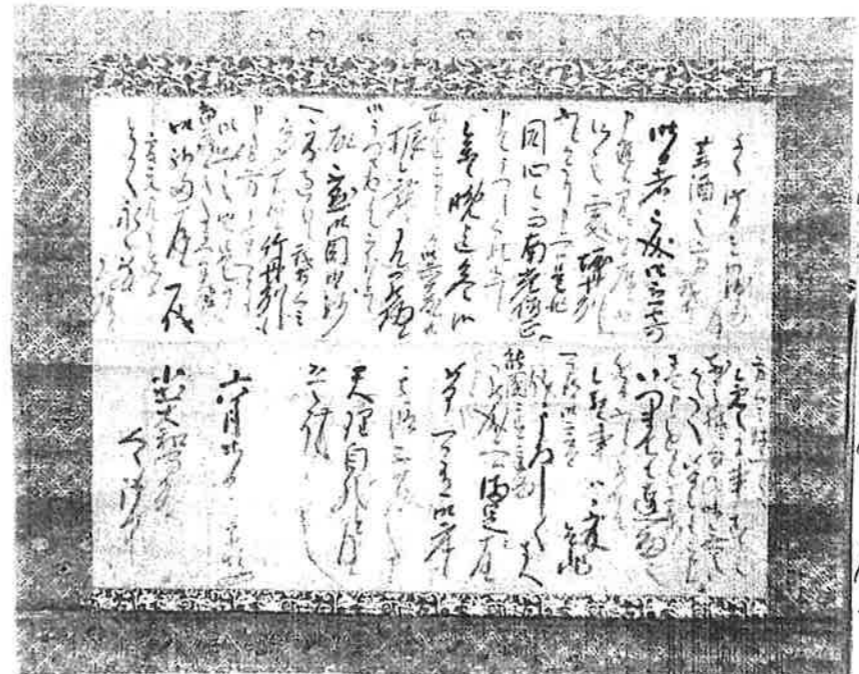
寛永九年十月廿日

柳宗矩宛書簡

殊堀丹州被懸目

候間彼所三可致違

留候。



澤庵禪師書簡 堀直奇の記載

寛永六年

堀直奇に贈る書

さて、春日夕七月廿九日迄の色々御才覺あまりの事に御禮も申され候。小堀

遠州へも、能々御心へ被仰入可被下候。今度之儀、御禮と申せば、いそにて御座候間、一向に不申入候。誠此度宗門之事に

まつすくな事を申て、御意にちかひ、出羽の國までなかされしと申事は、二代三代

も、人の口に残り可申候。みやうもんと申ながら、末世にはせめてみやうもんたり

とも残り候へは、満足に存候間、心さへちりにけかれ候はずは、身のくるしみ何と

も不存候。心をむさく人に見られて、身の安き事は、悦不申候。心をむさうして、

身をやすく仕候様と、安事は無之候。はちを思ふ計に、人は身をもはたし、苦し

みも仕候事に候。又々不入事中と可思召候。恐惶謹言。

八月十九日(寛永六年)

今夜あこやの松の月を見申候て、

さすらへてあこやの松の木の間よりつみなく見て見る今夜の月影

呈上 堀丹後守殿



春雨庵 山形・上山 昭和二十八年復元された。

澤庵禪師の流るる春雨庵



堀直奇の墓所・英林寺